中学校の修学旅行
最新リポート

社会や自然と向き合う中で

関西大学第一中学校
和歌山県・日置川　3泊4日
12年11月　実施

農業と民泊の体験から環境問題を問い直す

農業収穫体験（上）と農業の耕作体験

難しい梅剪定に挑戦

紀州木の森林間伐を体験

関西大学は、13学部を有する関西を代表する総合大学。これまでさまざまな分野で活躍する人物を輩出してきた。卒業生の交流が盛んな大学としても知られている。その併設中学校として一番古い関西大学第一中学校は今年創立100周年を迎える。関西大学第一高等学校と合わせて6年間の一貫教育を行っている。

中学校では修学旅行と呼ばず、「研修旅行」と呼んでおり、1年生で宿泊研修、2年生で自然教室、3年生で研修旅行、海外英語研修（希望者のみ）を実施している。その2年生での自然教室は、10年度から和歌山県の日置川地区の「ほんまもん体験」を中心とした民泊となっている。

自然教室は、09年度まで毎年7月に実施していたが、授業を7月の期末試験後に配置しなければならなくなり、実施時期を11月に変更。行き先も長野県八ヶ峰から、この時期でも研修が可能な日置川地区に変更した。

10年度の行き先変更を中心的に行った大西隆教諭（現在は関西大学第一高等学校勤務）は、「当時は農家民泊が流行り出した頃で、いくつか視察を行い、本格的に民泊を取り入れることにした。一度に200人規模の受け入れができることと、学校からの距離の近さが日置川地区の決め手となった」と当時を振り返る。

相良雅文教頭

大西隆教諭

大西教諭は、関西大学で教職課程の必修科目である特別活動論で、大学生に教育旅行や課外活動についても教えている。このため教育旅行に対して非常に高いクオリティを追求しており、「『行った』『見た』『楽しかった』という時代は終わった。教育旅行は明確なテーマを掲げるべきで、生涯学習の導入的役割を担う」と大西教諭。自然教室には「環境学習の側面」や「民泊『現地にも恩返し』という教育的要素が織り込まれている。

環境学習は、関西大学第一中学校全体で日頃から力を入れている。3年間毎年1回、身近な自然環境を考える「能勢プロジェクト」として、大阪府・能勢町にある耕作放棄地を元の田畑の姿に戻す活動も行っている。

「本校の生徒は、中学受験を経て入学してきており、オゾン層の破壊や地球の温暖化などの知識はある。しかし、身近にある環境問題に案外気づかない。その典型例が水と土の大切さだ。そのため水と土とは切っても切れない農業体験が良いと考えた」（大西教諭）。

民泊家族との別れで号泣

前回の自然研修は昨年11月7～10日の3泊4日。初日は、バスで出発し、大阪府立「少年自然の家」で研修を行った。そのまま宿泊し、和歌山県内に入るのは翌日昼から。少年自然の家に寄ったのは民泊の前にチームビルディングを行うためで、気持ちを切り替え、連絡系統の確認なども練習。古式の道具を使った火起こしと、カレーを作る調理実習も行った。

「たいしたことのない内容に見えるが、生徒も喜ぶし、研修としても意味がある」（相良雅文教頭）。

2日目から4日目の昼までが、日置川での民泊と体験学習。民泊先の農家には水や土の大切さを話してもらい、また、生徒を家の子や孫と同様に家の手伝いをさせるよう頼んでいる。

今の家庭では家事を手伝うことが減っている。毎年、自然教室の引率にあたる相良教頭は「電化が進み、家事で汗水たらすようなことはなくなってきた。刃物や火を使わせない家庭がほとんどだ。研修行程では意識してそういうことをさせている」と話す。

体験学習は備長炭作り（薪割り、木材の窯出し）、森林間伐、藍染、梅の剪定などで、和歌山らしい「ほんまもん」体験を生徒が選んでいる。

自然教室の目的の一つ、「現地への恩返し」については、日置川のPR用に間伐材の看板を作り、最終日に贈呈した。これは一昨年度に自然教室を行った生徒たちからの申し送り事項で、「日置川は魅力的なところなのに看板がないのが残念」という思いを後輩たちに託した。

自然教室の目的地変更については後日談がある。11年9月に発生した紀伊半島豪雨が日置川地区にも甚大な被害をもたらした。10年度に自然教室を行った生徒たちは現地を心配しボランティアを希望したが、まだ中学生ということで、学校側はお見舞いの手紙を送ることを提案した。

そのことを知った関西大学第一高等学校が文化祭の売り上げの一部を日置川地区に寄付。中学校のPTAも急遽バザーを開いて、寄付を集めた。

日置川との交流は今も続き、今年の創立100周年の式典には日置川地区の代表者が出席することになっている。

国立市立　国立第二中学校
滋賀県・日野町　2泊3日
13年5月　実施

農村と古都の2体験で生徒たちの「心を耕す」

田植え作業も一緒に

東京都国立市の国立市立国立第二中学校は、生徒数が562人。教育方針として「主体的に取り組む活力ある学校生活を通して、思いやりの心を育み、自然を愛し、人の和を大切にする豊かな人間性を育成する」（井手伊澄校長）などを掲げる。

豊かな人間性の育成は、今年5月に滋賀県・日野町などで実施した3学年の修学旅行でも要だ。「田舎での生活やそこで暮らす人々との交流を通し、心と心の触れ合いの大切さを体得し、自分を見つめ、たくましく生きる力を培う」ことを目的の一つとしている。

修学旅行はこれまで京都、奈良での観光型が中心だったが、2007年度から農村民泊を伴う農業体験型に切り替えた。その理由を井手校長は「今の子供たちに何が足りないのか問い詰めたとき、『人との触れ合い』の体験がもっとあっていい。それが子どもたちの心を耕し、成長するために必要不可欠なものだと考えた」と語る。

民泊家庭での夕飯の手伝い

和服を着て旅館の女将も体験

日野町での修学旅行は12、13年度と実施。それ以前の農業体験先は新潟で、11年の東日本大震災の影響で変更を余儀なくされ、担当する旅行会社が提案してきたのが日野町だった。

井手伊澄校長

中田考浩教諭

決め手になったのは二つ。井手校長が日野町で修学旅行を行った複数の中学校の校長に電話をして聞いて、その評判が非常に高いこと。もう一つは、京都や奈良で日本の古い文化に触れさせる経験は必要だとする保護者の意見があり、日野町ならば京都と組み合わせて、農村と古都という二つの体験が可能な修学旅行を実現できるためだ。

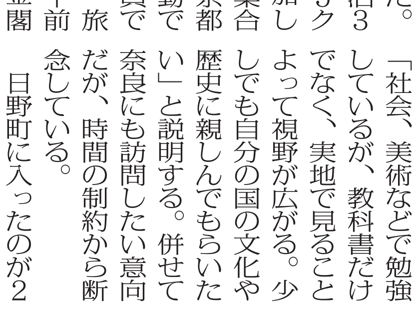
5月15日からの2泊3日の行程。3年生・5クラス184人が参加した。初日は東京駅に集合し、新幹線で昼前に京都に到着。昼は班別行動で市内を巡り、夜は全員で京都タワーを訪れた。旅館に宿泊し、翌日の午前中もクラスごとに金閣寺、竜安寺、伏見稲荷大社、東寺など見て回った。

修学旅行の企画を担った中田考浩教諭は、古都・京都での学習について「社会、美術などで勉強しているが、教科書だけでなく、実地で見ることによって視野が広がる。少しでも自分の国の文化や歴史に親しんでもらいたい」と説明する。併せて奈良にも訪問したい意向だが、時間の制約から断念している。

日野町に入ったのが2日目の午後1時半。体育館での開村式では、日野町側は町長が、学校側は校長と生徒代表があいさつをした。終了後、生徒たちは3、4人のグループに分かれ、民泊家庭51軒へ散っていく。不安顔の生徒がにこやかな受け入れ家庭の人たちと対面して安堵の表情に変わるのが、教諭らには分かる。

生徒たちは3日目の昼まで各家庭に滞在するのだが、その間にやることは各家庭で違う。家庭の多くは農家で、田植えや農機具の洗浄などの作業をしたり、竹細工を教わったり、夕飯作りを一緒に手伝ったりする。1軒だけ旅館があり、和服を着て、女将の仕事を体験した女生徒もいた。

昼の離村式では、お礼の意味を込めて生徒全員で『ふるさと』の歌を合唱。民家の人たちも一緒に歌ってくれる。バスに乗り込むときには生徒一人一人と握手をして、別れる。民泊家庭で過ごした時間はわずか1日だが、生徒のほとんどが泣いている。「絶対に手紙を書くね」「大人になったらまた行くから」などと約束をする生徒も多い。



花飾りの作り方を教わる

閉村式でのお別れに涙ぐむ

修学旅行後に書かせた作文を見ると、生徒たちの思い出の多くは日野町での出来事だ。民泊先のお婆ちゃんから聞いた話ばかりで作文を埋めてきた生徒もいたほど、心に強く残っている。

「町の人たちから手紙を送ってもらった生徒はとてもうれしそう。あそこまで顔をきらきらにして喜んでいる様子はなかなかない。それだけ良い触れ合いができたのだなと思う」と中田教諭。事後アンケートでもほぼ100%に近い生徒が「心と心の触れ合いができた」と答えている。

井手校長は、「開村式で子供が入ってくると拍手で迎えてくれ、家々の玄関には『ようこそ国立二中の皆さん』と貼ってあるなど、日野町は本当に温かい地域だ。その温かさにめいっぱい触れて子供たちは帰ってくるのだから、お別れであれだけ泣くのだろう」と語る。

中田教諭は「家庭の方が生徒の様子を知らせてくれるので、不安はなかった。日野町は連絡が密にできているのがとても良かった」と安全面での対応を評価する。

生徒たちが田舎の人の温かさを学んだ日野町での修学旅行。井手校長は「この経験が生きて、将来大人になって小さい子を家に泊めてあげたときに、その子に温かく接してあげる素地が備わったのではないか」と信じている。

大自然と笑顔の町南会津へ。

笑顔と笑顔が出会う場所…　心温まる南会津町

南会津町は、平成18年3月20日に田島町・舘岩村・伊南村・南郷村が合併し誕生いたしました。南会津町は、豊かな自然とそこに住む町民の素朴な人柄と温かい心が宝物です。私達が住むこの南会津で、四季それぞれの季節の中で営まれる農村の生活をそのまま体験していただき、大きな感動が得られますよう、町をあげて農村生活体験学習を推進しています。

南会津農村生活体験推進協議会　会長　渡部　龍一

福島県南会津農村生活体験推進協議会
事務局　みなみやま観光株式会社
〒967-0004 福島県南会津郡南会津町田島字後町甲3973-1 FAX 0241-62-7788　E-mail contact@minamiyama1.info
TEL 0241-62-2250 http://www.minamiaizu.co.jp/

「人と防災未来センター」で、今、実感できる防災教育を。

防災は、過去の経験と教訓を「学ぶ」ことからはじまります。人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に伝え、防災の知識と、今後起こりうる災害への備えを学ぶ「防災学習施設」です。

小・中学生以下 無料

団体予約
ご来館日の
6ヶ月前の1日から
FAX先着順で受付

展示内容のご案内

震災を体感
1.17シアター
阪神・淡路大震災の地震破壊のすさまじさを大型の映像と音響で体感します。
震災直後のまち
震災直後のまち並みをジオラマ模型でリアルに再現しています。
大震災ホール
復興に至るまでのまちと人を、直面する課題とともにドラマで紹介します。

震災を辿る
復興への道
地震直後や復興過程の生活・まちの姿をメッセージとグラフィックで解説します。
記憶の壁
震災関連資料を提供者の体験談と共に展示しています。
語り部コーナー
ビデオで震災体験を紹介したり、語り部が自らの体験を語ります。

防災・減災を体験
防災・減災ワークショップ
実験やゲームを通して、防災・減災に関する実践的な知識を学習します。

東日本大震災を知る
こころのシアター
東日本大震災被災地のドキュメンタリー映像等を3Dで上映しています。

資料請求受付中
「送付先住所・団体名・ご担当者名・電話番号」+「資料請求」とご記載のうえ、FAXにてご請求ください。FAX 078-262-5055

阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター
TEL. 078-262-5050（観覧案内）
〒651-0073　兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
http://www.dri.ne.jp